HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小中移行における学校適応の変化過程と関連要因の縦断的検討 ： なぜ中1で不登校は増えるのか
Author(s)	侯, 玥江
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第16612号
Issue Date	2025-09-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16612
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98222
Type	doctoral thesis
File Information	HOU_Yuejiang_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）　　氏名：侯　玥江（Hou Yuejiang）

主査 教授　加 藤　弘 通
審査委員　副査 教授　大 久 保　智 生（香川大学）
副査 准教授 大 谷　和 大

学位論文題名
小中移行における学校適応の変化過程と関連要因の縦断的検討
―なぜ中 1 で不登校は増えるのか―

不登校は年々増加傾向にあり、特に小中移行を経て、中 1 で顕著に増加することが知られている。本論文は、この移行期に焦点をあて、不登校児童生徒を含む小中学生を対象に 11 の研究を行うことで、学校への適応が、いつ・なぜ・どのように変化するのかを明らかにし、不登校予防に向けた知見を提示するものである。

第 1・2 章では、先行研究を整理した上で、以下の 3 つの目的を設定した。目的 1 は学校への不適応状態から不登校までの連続性（スペクトラム仮説）を実証的に検討し，アナログ研究の理論的基盤を構築することである。目的 2 は小中移行に伴う学校適応を時間軸に伴って動的に展開されるプロセスとして捉え，その中にある異なる位相を明らかにし，また各位相において異なる適応軌跡を示す下位集団や個人差のパターンを明らかにすることである。目的 3 は小中移行後の学校適応と規定要因の関連性の強さの時間的変動を明らかにすることである。これらの目的を達成することにより、いつ・どのような適応への支援が必要か、基礎的な知見を提供することを目指した。

第 3 章は、不登校状態にある児童生徒も含めた調査により、学校不適応から不登校へと至る過程を連続と捉えるスペクトラム仮説と非連続と捉える仮説を検討した。その結果、スペクトラム仮説が支持されることを示し、不登校についてのアナログ研究の有効性を実証した。第 4 章は、小 5〜中 2 まで 8 時点 4 コホートを追跡した縦断データにもとづき、中学移行後の適応過程に、新たな環境の不確実性に対処していく短期過程と、環境に適合し個人差が固定化されていく長期過程の 2 つの異なる位相があることを示した。第 5・6 章では、中 1 の 10 時点の縦断データにもとづき、マクロ・ミクロ要因と学校適応の関連性の強さの時間的変動を検討した。その結果、短期過程には、小規模校の出身であることや ASD 傾向が関係している一方で、外向性・協調性といったパーソナリティ要因も時期によって影響の仕方

が異なることが明らかになった。さらに教師との関係、友人関係は、年間を通じて、生徒の適応に影響するものの、4 月、9 月、2 月で特にその影響力が増すことが明らかになった。

第 7 章では、以上の結果を総括し、本件の目的に対する考察を行い、なぜ中 1 で不登校が増えるのか？という問題に対して一定の回答を与えた。すなわち、中 1 という時期は、短期過程は、環境の不確実性により、個人の脆弱性がより顕著になりやすく、また教師や友人の影響力も大きいため、教師や友人からの有効な支援が得られないと不登校傾向が高まる。その一方で、長期過程は、パーソナリティ要因の影響が時期によって異なった形で現れ、中 1 前期からの不登校傾向が蓄積される個人も現れる。また 9 月、2 月といった教師・友人の影響力が増す敏感期が存在し、その時期にこれらの対象との関係が悪化した場合はさらに不登校傾向が高まる可能性が示された。以上をふまえ、最後に、本研究が従来の不登校研究に対してもつ学術的意義と、教育現場にもたらす実践的意義について述べた。

審査委員会は、本論文の意義を以下の 2 点にあるとした。1 つは、不登校研究におけるアナログ研究の有効性を実証した点である。これまでの不登校研究の多くは、不登校生徒自体を対象とせず、学校に来ている不登校傾向の高い生徒を対象に知見を積み上げてきたが、そこに連続性を前提としてよいかどうかは不問のままであった。それに対して本研究は精緻なモデルにもとづき、不登校傾向の高い生徒と実際に欠席に至る生徒の間に連続性があることを示した。このことは、これまで行われてきたアナログ研究の知見が、実際の不登校児童生徒の研究として有効であることを示した点で非常に大きな意義をもつといえる。加えて 2 つは、これまでの適応研究は、個人と環境の関数として適応を捉えてきたが、本研究はそれに時間の視点を加えた点である。これにより、どのような支援が必要かだけでなく、いつ、その支援が必要かまでを明らかにした。このことは教育現場に対し、より精緻な知見を提供するものであり、極めて高い実践的意義を有しているといえる。

以上の理由から、本研究が不登校研究にもたらした貢献は極めて高いと判断し、審査委員会は、本論文の著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与されるに値すると認めた。